

アントレプレナーシップ学環  
一般選抜入試[前期日程]小論文プラス型 問題 (模擬)

AI の発展に関する以下の文章を読んで、下の設問に答えなさい。

わずか半年ほどで、LLM (\*大規模言語モデル) の使い方も変わってきた。

これからは LLM が外部のツールやデータベースと連携し、より能動的にタスクを実行する「エージェント AI」としての側面が強くなる。もはや、LLM は具体的なアクションを実行できる「デジタルな労働力」だ。

LLM においても、画像生成 AI や動画生成 AI と同じように、クラウドのプロプライエタリ (モデル非公開) なものを使うのではなく、ローカル LLM (\*ユーザー側の PC や社内サーバなどで動く LLM) を使った方が良いことが今後増えてくるはずだ。長期的なランニングコストと、機密保持の観点では、ローカル LLM が有利だからだ。

グーグルや OpenAI のようなモデル非公開で月額課金型の LLM じゃないと高い精度が出ないと思っている人はまだ多いかもしれない。確かに、OpenAI などが新しい LLM を投入した「その瞬間」は最高性能を出す可能性は高い。というよりも、「最高性能」になった瞬間に発表するから当然だ。

ただ、例えば 3 カ月後、下手をすれば翌週には、アリババや DeepSeek が、同等以上の性能を持つオープンウェイトモデルを発表してしまう……これが、いま生成 AI 業界で起こっている地殻変動だ。

巨額を投じて学習させた月額課金型の LLM が中心の欧米陣営は、実は苦しい戦いを強いられているというのが筆者の見方だ。

Meta のオープンモデルである Llama4 も、出現当初は期待はずれと考えられていた。だがその後、バグがとれると十分実用的に戦えるモデルだということが再認識された。実際に筆者も Llama4 に長文を理解させて動作と精度を確認できたことから、もはやローカル LLM でほぼ全ての業務をこなせるようになってきたと考えても良さそうだ。

◇エージェント AI とロボティクス

自律型 AI システムやエージェント AI の研究開発は急速に進んでいる。人間の代わりにメールで営業し、人間の代わりに会社ごとの提案資料を作り、さらに人間の代わりにコーディングして納品するというのも、今や理論上は全く不可能ではない。

そして、AI とロボティクスの融合も加速している。ロボットが人間と自然な会話を交わしながら、周囲の状況を理解し、コーヒーを淹れたり、物を片付けたりする。SF 映画で見た光景が、現実のものとなりつつあるのだ。物理世界で作業できる AI ロボットは、製造業、物流、介護、災害救助など、人手不足が深刻な分野での活躍が期待される。

特に人型ロボットは、既に中国で数百万円で売られ始めている。フランスの AI 大手 HuggingFace は、50 万円の人型ロボットの販売を始めた。こうした機械群が肉體労働を置き換えるのはむしろ必然だろう。

これらの技術的ブレイクスルーが、今まさに同時多発的に起きている。もはや、AI は研究室の中の存在ではない。ビジネス、そして社会のあり方を根本から変える「実用ツール」なのだ。

実用ツールとしての AI 技術は、具体的にビジネス、特に経営のあり方をどう変えるのだろうか？ 筆者は、「経営の自動化」が一気に現実味を帯びてくると考えている。そして、その先には「自律型企業 (Autonomous Company)」とでも呼ぶべき、新たな組織形態すら見えてくる。

◇ホワイトカラーの「聖域なき」5つの自動化シナリオ

具体的に検討しよう。

① 意思決定支援から意思決定代行へ

従来の BI (Business Intelligence) ツールは、データを可視化し、人間の意思決定を「支援」するものだった。だが、これからの AI は、膨大なデータと過去の事例、市場の動向を分析し、「最適な戦略オプション」を提示するだけでなく、一定の条件下では自律的に意思決定を行うようになる可能性は高い。

例えば、リアルタイムの市場データに基づいて広告予算の最適な配分を自動調整したり、サプライチェーンの混乱を予測して代替調達ルートを自動で確保したり、といった具合だ。

② 戦略立案・市場分析・競合分析の AI 化

市場調査レポートの作成、競合企業の動向分析、新規事業のフィジビリティスタディ(\*実現性・可能性の調査)といった業務は、これまで専門のアナリストやコンサルタントが担ってきた。しかし、LLM と VLM(\*視覚言語モデル)を組み合わせれば、インターネット上のあらゆる公開情報、業界レポート、ニュース記事、SNS の投稿などを収集・分析し、洞察に満ちたレポートを瞬時に生成できる。しかも、24 時間 365 日、疲れることなく最新情報をアップデートし続ける。

(以下、③④⑤の例を省略)

これらはほんの一例に過ぎない。カスタマーサポートの高度化、ソフトウェア開発の自動化 (AI によるコーディング支援やテスト自動化)、社内ドキュメントの自動整理とナレッジ共有など、AI が活用できる領域は、ホワイトカラー業務のほぼ全域に及ぶと言ってもいい。

出典：清水亮「AI 研究者が指摘する、最新 AI で「消滅する」5つのホワイトカラー仕事…もはや聖域はない」(ビジネスインサイダージャパン WEB サイト記事[Tech Insider：2025 年 6 月 16 日]より。一部省略・改変。\*を付した説明は問題作成者による。)

【1】上記の文章の内容を 300 字以内で要約しなさい。

【2】ホワイトカラーの仕事の自動化シナリオとして、上記の文章中で挙げられた①②以外の例を考えて、

(1) 「意思決定支援から意思決定代行へ」「戦略立案・市場分析・競合分析の AI 化」のように、自動化シナリオが実現しそうなその他の「経営に関わる業務分野」を 20 字前後で挙げなさい。

(2) (1) の内容について、200 字程度で説明しなさい。